

三月一九日(日)

「で、話ってなんだっけ？」

いつものように、作業着姿の晃くんは、今運ばれてきた串を摘み、串に刺さっていたささみを一気に食べた。スムーズな動きで旨そうにビールを飲む。

「瑞希さんのことなんですけど、」

「え、もうやった？」

「いや、そういう話じゃなくて」

「できちゃった、じゃないよな」

晃くんの目つきが鋭くなる。心なしか、ジョッキを持つ肩にも力が入ったように見えた。全力で頭を振って否定する。

「じゃあ、何の問題もない。妹の貞操とか、興味ないしな」

晃くんはメニューを眺め、次に何を頼むか検討し始めた。僕の方を見て、「どうする？」と訊いてきたけど、「僕のことは気にしないで、好きなように頼んで」と答えた。

「いや、割り勘だし」

「いやいや、コッチから呼び出したんだし」

「同級生相手に、無理すんなって。で、どうする？」

「じゃあ、コレかな」

晃くんが既に呼んでいた店員さんに、メニューを指して注文する。

「山芋の鉄板焼き？ 随分、健康的なこと」

「こういう時じゃないと、食べないし」

独り暮らしで、他の根菜ならまだしも、山芋を買うことはない。串も目ぼしいものは一通り頼んだし、お腹もそれなりに膨れてきた。晃くんもそろそろ締めるつもりなのか、釜飯をオーダーしていた。

彼はメニューを戻し、ビールを一口飲んで喉を湿らせた。

「あんたと瑞希が友達だろうが、一線越えようが、二人でよろしくやってくれれば、それで十分。聡太が義理の弟になるより、百万倍マシだ」

藤堂聡太とは晃くんの方が付き合いが長いだろうに、悲しい評価を下されてい

る。確かにアイツが友達なのはいいとして、親戚になるのは自分も嫌かもしれない。

「一線越えるときは、その前に挨拶はしといてくれよ。オレはいいけど、親父がね」

晃くんはすっかり冷えたポテトフライを摘み、ケチャップをすくった。

「ま、親父が面倒なのはお互い様よ」

「ははは。そうだね」

自分でも嫌になりそうな渴いた笑いが口から漏れる。美桜と付き合う人は大変だろうな。僕の場合も面倒かもしれないけど、瑞希さんなら大丈夫な気がする。

そうこうしているうちに、山芋の鉄板焼きが運ばれてきた。晃くんが注文したスライストマトも一緒に運ばれてきた。

「そっちも野菜？」

「こういう時じゃないと、食べないんだよ」

晃くんはたつぷりマヨネーズを乗せて、トマトを頬張った。今度は箸の先にマヨネーズをつけ、それだけを舐めてビールを飲んだ。

「ケチャップとか、マヨネーズとか、好きなんだ」

「好きっていうか、物珍しい、かな。家でも外でも和食が多いし、兄貴もいた時は争奪戦だったし……」

「へー」

そう言えば、焼き鳥が届いた時も素早くパパッと食べてたな。職人らしい早飯かとも思ったけど、そういう影響があるのかな？

「みいちゃんは普通に食べてた気がするけど……」

「あいつは婆さんがね」

晃くんは急に、何かいいいたような表情を浮かべ、「へええ。みいちゃん、ね」とねっとりした口調で言った。

「やっぱり、詳しく聞かせてもらおうか」

晃くんはグツと身を乗り出した。壁にかかった時計に目をやっても、釜飯が出来上がるまでは、まだ時間がかかる。目の前を通りかかった店員さんを呼び止め、メニューのドリンクページを開き、追加のビールをオーダーした。